学位論文審査結果の要旨

平原　俊

本研究は、自然資源管理、特に森林、草地管理等において「市民」がその担い手として、真に役割を果たすことが可能かという極めて現代的な課題に取り組んだものである。自然資源管理においては、従来から、地域住民等の伝統的な管理が行われてきた一方で、自然資源の公共性・公益性を反映して、科学的な知見に基づいた技術者による公的管理が行われてきたが、近年、両者共に深刻な課題を抱えるようになり、新たな担い手として「市民」が注目されることになった。本研究では、このような状況を解析する切り口として、自然資源管理に必要な「技術」の淵源としての「知識」に着目し、研究者や技術者が有する「科学知」、および、伝統的な担い手が有する「伝統知」を包含する概念として「専門知」を定義したうえで、市民によって生産される知識を「市民知」として位置づけ、自然資源管理のガバナンスにおける３つの共通した研究課題を明らかにすることを目的として、広町緑地（神奈川県鎌倉市）、赤谷の森（群馬県みなかみ町）、藤原地区上ノ原（同左）の３事例の詳細な分析を行った。

その結果、「市民知」は、「専門知」に対して、自然資源に関する価値を多様化する機能を持つが、「専門知」に基づく自然資源管理の技術のすべてを担保することは困難であることを明らかにした。また自然資源管理において、「市民知」と「専門知」を共存させるためには、それぞれの担い手が相補的な関係を構築できるかが重要となり、その条件として「対等性」、「主体性」、「娯楽性」の３点を提示した。このような知見は、今後、自然資源管理における市民の関与が増大していく傾向がある中で、そのあり方や望ましい方策について具体的な示唆を与えるもので、大きな成果と言える。

以上のように、本論文は、新たな分析の枠組みを提示したこと、多くの新しい知見を明らかにしたこと、論文の内容、構成および公表論文数などから、本学位論文審査委員会は、全員一致して、本論文が博士（農学）の学位論文として十分価値があるものと判断し、合格と判定した。

最終試験の結果の要旨

平原　俊

最終試験は、平成３０年６月２９日に東京農工大学農学部にて、学位論文の公開発表に引き続き、論文審査委員により行われた。最終試験では、学位論文の専門領域に関する質疑応答がなされた。その結果、本審査委員会は、平原　俊さんが自立して研究を進めることができる学力と見識を有しており、博士（農学）の学位を授与するに足る資格があると認め、最終試験を合格と判定した。